



TITLE:

岡道男先生訪問

AUTHOR(S):

中務, 哲郎

CITATION:

中務, 哲郎. 岡道男先生訪問. 西洋古典論集 2001, 別冊: 115-118

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68702>

RIGHT:

岡道男先生訪問

中務哲郎

今日か明日会って話したい、と岡先生よりお電話を頂いたのは99年12月25日のことであった。2時間後に大阪医大付属病院のお部屋に伺うと、先生は奥様を遅い昼食へと促し、僕を窓際へ導かれた。先生はベッドに、僕は椅子に腰かけて、並んで窓の外を眺める小津安二郎スタイルになって、6年前の先生のスピーチが思い出された。京都大学文学部では、停年退官を迎えた先生方が3月の最終教授会の席で留別の辞を述べられる。岡先生は、自分の一生は前半は黒板を前にして、後半は黒板を背にして坐り、それが全てだったと語った哲学者を引き合いに出しつつ、私の場合は後半も学生諸君と並んで黒板に向かって学ぶ日々でした、と述べられたのだった。

窓の向うにはメタセコイアの姿がなかった。96年3月、同じ病院の別の部屋に入院された時には、窓から茶色い円錐形の樹影が遠望され、毎日あれを見て慰められているが何の木だろうか、とお尋ねがあったのだ。

先生は淡々と語られた。癌が骨盤に転移していて有効な治療はなく、来週よりターミナル・ケアに入る。年配のT医師は薔薇色の見通しを語るが、若いW医師の説明の方が事実に近いと思われるので、意識のしっかりしている間に伝えるべきことを伝えておきたい。いずれにしても終末は訪れるので、今日君に来てもらった。「『オイディプス王』再考」が最後の論文になると思うが、これが初校を済ませたゲラです、岩波に送って下さい。再校は宜しく頼みます。それにしても、オイディプス伝説もソポクレスの劇も、神託の実現を避けようとしてする行為が結果としてその実現を招いてしまう、という意味で同じ構造をしている、こんな簡単な拙論の趣旨をどうして皆さん分からないのか。

『アエネーイス』の翻訳は3巻まで出来てフロッピーに入れてあるが、残りは小川君か高橋君にやってもらって下さい。私の訳に遠慮することはない、スピードアップのための下敷に使って、あとは自由にやって下さい。京大での最後の2年の授業「叙事詩と歴史」はノートもとってあるので中篇くらいの論文にしたかったが、もうできない。蔵書は欲しいものがあれば皆さんに取ってもらい、後は適当に処分して下さい。古典学のアルヒーフができるのならばそこ

に寄贈します。葬式は質素に、木曾好能さんの時のように、文学部には1週間後に通知して欲しい。ちょっと頑張りすぎたかもしれない。同志社にずっといた方が自分のためにも家族のためにもよかったかもしれない。学会名簿のコンピュータ化の時はしんどかった。ギリシア悲劇全集断片の時はしんどかった。Poeticaの時もしんどかった。キケロの時もしんどかった。君も体には気をつけなさい。歴代の助手は皆よくやってくれた。私の時が一番学生が輝いていた、負けそうに思った、負けないように勉強した。今はこうして語りあっているが、痛みに顔を歪めることもあるし、見苦しいことがあるかもしれない。意識がなくなって、もし人の悪口などを言ったとしても、一切信じないでほしい。父君が終焉の時にうわ言めいたことを発せられたので、このようなご発言になったのだ。ここから、先生の父上母上の最期の時のこと、僕の父母の臨終の様子などを話しあった。

奥様はもう昼食からお帰りになっただろうか、ロビーで長くお待ち頂いているといけなないので確かめに行こうとすると、先生も立たれた。10キロも痩せてふらふらするので肩につかまらせて下さい、と。歌舞伎の花魁道中で、花魁が若衆の肩に手をおいて歩む、そんな感じでおかしかった。96年3月のご入院の時には、見舞人をエレベーターまでお送り下さりながら、今日点滴がとれました、点滴スタンドなしで歩くのは1カ月来のお友だちをなくしたみたいで淋しい、と軽口を叩かれた先生であったが。

ロビーに人影はなく、部屋へ戻ろうとすると、もっと話していたいなあ、と。そこへ奥様が長女の千晴さんを伴って戻って来られた。いろいろ精神的に辛いことを頼んで申し訳ないが、友情に免じて許してほしい、と、お部屋を辞する前に、そんなことまで先生は仰言った。

夕刻再びお電話を頂いた。面会謝絶にするので宜しく。ターミナルということ误解していたが、これは癌が治療不可能の段階に進んでいるということであって、命が今日明日ということではないので安心して下さい、と。

先生は2000年の新春を病院で迎えられた。ギリシア・ローマで「新しい」ということは必ずしもプラスの意味に結びつかぬことについて、例証をお尋ねする手紙を差し上げたところ、23日にお答の電話を下さった。その際、病院内を何とか歩けていたのが、今は部屋の中を移動するのがやっとです、「叙事詩と歴史」の論文構想はしんどい、と仰言りながら、アイデアの概要を語られた。2月1日夜、市子夫人より、会いたい人には会わせておくよう医師から告げ

られました、とお電話があった。

4日昼前にお部屋に伺うと、先生はまず、今日はたまたま痛みがなく、こうして話していただけるが、いつできなくなるかもしれない。それも仕方がない。私は運命論者で、モイラでこう決まっているのだと思う、と言われた。人間は自分の一つのモイラに満足すべきで、臓器移植には反対だけれども、このような技術が可能になった現代に生を享けるのもモイラかと思うと分からなくなります、と申し上げると、そうですよ、私だって昔ならこんなに永く生かせてもらえなかった。『詩学』の訳が出来、キケロの訳が出せたのも医療のお陰で、『オイディプス』も書き直せたという意味では思い残すことはない、と仰った。「『オイディプス王』再考」への加筆の際に行動と行為を別けて定義したことについて理由を説明されるので、それなくしても分かる人は分かっていたのではないでしようかと申し上げると、ちょっと間をおかれた。

それから先生は、『詩学』の翻訳がメイ・スメサースト教授から絶賛されたという話を打ち明けられた。私は学説史を背景にして自説を展開しているだけだが、独創的と誇れるところがある。岩波文庫本165頁注(9)「大きなあやまち」の解釈、187頁注(8) *epeisodiun* (筋書を場面に作り上げる)、及び、191頁注(17) *idion* (筋書だけに属する) への訳注、149頁注(2) 歴史と詩の相違、150頁注(3)(4) 普遍的ということに関する訳注、などがそれだ。悲劇の起源についてのアリストテレスの議論は、ホメロスから発展した(劇的な構成原理、初め・中間・終りを持つ生物である点)とする考えと、サテュロス劇からとする考えと二つあり、明らかに矛盾している。矛盾を矛盾とせず折り合いを付けようと理屈をこねるから分からなくなるのです。アリストテレス『詩学』は *eikos* または *anankaion* な筋で普遍的なものを目指す。『レトリカ』は *eikos* のみ。ホラティウスは *mythos* (生き物) から *fabula* (はなし) に逆戻りし、『レトリカ』の *eikos* を引き継ぐのみなのに、両者をごっちゃにしている人が多い。36頁11行に「筋は、悲劇の目的であり、目的はなにものにもまして重要である」とあるが、これだけでは何のことか分かりますか？ 私のような注をつけて初めて分かるのに、それがなされていない。

先生にとっては、右を下にして横になれるのが最も楽なようであった。それを強いて仰臥し、ほとんど右手ひとつで文庫本を操られた。本には折り癖も附箋もないのに、指示したい頁が一瞬にして現れた。こんなに明晰な頭脳が、なぜ命を終えなければならないのか。『詩学』を語る先生の口調は壮者の如く

であったが、次に来てもらってももう会えぬかもしれないから、と握手を求められ、部屋を辞する時には、寝返りが打てぬからこれで失礼、と後向きに手を振られた。

21日付の来信は奥様からであった。昨日から点滴にモルヒネを入れて貰いました。昔のこと、し残した仕事のこと、わたしのこと、等々次々と頭の中に出てきて一睡もできず、気が狂いそうになる辛い毎日だったと申しております、と。先生が亡くなられた次の日にも、奥様は先生の言葉を伝えて下さった。最期は、わたしや医師・看護婦の皆さんに有難う有難うと言っていました。私のあと自殺などしてはいけない、20年は元気で生きて、ゆっくりでいいから私の所に来てくれ、と言いました。やりたいことがまだ一杯ある。二つだけ最後のお願いだ、眠っている時起こさないでほしい。うん？ 起こしたか・・・そう、起こしていないか。これが最後の会話でした、と。もう一つは何であったのか。

岡先生は人生における棘のようなものも遺された。癌に冒された骨盤の痛みは言語を絶するものであった。無神経な医師が、頑張りましょう、と言って手を握ってくるのが、実は跳び上がるほど痛かったと伺った。先生は、こんなに苦しい目をしないとイケないのは、何か悪いことをしたからだろうか、と奥様に洩らされたという。人を殺し、干物にして喰らい、悪逆無道の限りを尽くした盗跖が天寿を全うしたのに、孔門七十子の中で向学心随一、師が最も褒めた顔回が貧窮の裡に夭死した。司馬遷はこの不条理に、果たして天道は善を好むのか、と問わざるを得なかった。岡先生ほど人に優しく、悪心を懷かれたことのない方がこのような苦しみを味わわねばならぬとは、そして、書くことが一杯あるのに世を去らねばならぬとは、果たして天道は善を好むのか。

先生の主著『ホメロスにおける伝統の継承と創造』には京都の松平千秋、テュービンゲンのヴォルフガング・シャーデヴァルト、マインツのヴァルター・マルクと三人の恩師の名が記されている。岡先生は西洋古典に進まれた頃、松平先生の再来と噂されていたことをご存じであったかどうか。ともあれ先生は、松平先生の学問と生活の両面に、終生渝らぬ尊敬の念を懷いておられた。松平先生も今や同僚となった弟子を評して、岡君はよくあれだけ本が買えるね、しかしあれは細君も偉いんだよ、と仰言ったことがある。松平先生の停年退官の時のお言葉、後顧の憂いなし、も忘れられない。岡先生の学風は、ヘレニストよりラティニストによりよく受け継がれている。